

『染谷茂ロシア語文法小話』を読んで

(東京・美顔プリンティング出版部 1979 B5 270p.)¹

染谷先生の御労作が一冊に纏められた。染谷語学の一端を垣間見ることができるようになったのは、有難いことである。1942年国立ハル濱学院学報所収のものから1973年『学鏡』に発表された論文に至る46篇。巻末に先生の「あとがき」と内村剛介先生の跋がある。

此度何方の推挽によるものかは知らぬが、本書の書評を書く機会を与えられた。親しく警咳に接することのなかった者として、評言は収録されたものに依る外はない。到底任に耐える筈はないのだが、或いはその方が盲蛇に怯わずでよかろうという事かも知れぬ。だが書くほどの事は既に内村先生の跋に見える。しかし責は果たさねばならぬ。という訳で駄文を草する事になった。可惜錦上に泥を乗せることにしかならぬが、予め御容赦を願っておく。

若輩が真正面から評言を行うのは烏滸の沙汰であるが、敢て面を冒せば各篇何れも珠玉の小品である、というに盡きる。平凡な結論である。だがそこに至る経過は必しもしかく平凡なものではない。

先ずロシア語で書かれたものが2篇あるが、評言を行う資格がないのでこれを措く。他はすべて日本語によって書かれている。これがこの論集の際立った特徴である。これは特に「語学」の論集には近頃ありがたい事であって、染谷語学の根底をなすもののあらわれに外ならないと思われる。

従来ややもすれば「語学屋」とは、言われた事、語られた事の内実には頓着なく、些末な現象を言い立てて口に糊する徒輩の謂であるとする傾きがある。語学に携わる者自身が、却ってそれを「科学的」な事と思い良しとする風潮が著るしいのも亦、遺憾乍ら事実である。かくして「語学屋」と「文学者」とは、永久に逢うことなき外異の民として共通の言葉を喪い、徒らに白い眼を向け合うに至る。

とは言えこれについて語学の側のみがその責を負うべき道理はない。かの日夏耿之介をして「夫の日本語々彙に貧しく、国語を毀損しつづけてやまない昭和の通訳家的片ことの悪訳本」と評せしめた状況のあったことをも、併せて思う可きであろう。一は現象に眼を奪われてその由って来る所に思いを潜めず、他は徒に内実を探るに急であって、それを伝う可き形式を軽んずる。現象形態にこそ異なる所はあれ、両者その根源は一である。

染谷語学の真面目は、互に乖離せんとするこの境に身を据え、飽くまでもそこに跼止まったところにあると考えられる。随所に見られる強い理論的性向にも拘わらず、なおかつ全体として言語の具体に即し、具体を離れることがなかった。これには天性ともみえる

¹『現代ロシア語』 1980年2月号 昭和55(1980)年2月1日 38-39頁。

繊細な観察力と洞察に裏付けられた該博なる知識があっても、未だむつかしい。内実と形式を統合せんとする強靱な意志の力とすぐれた平衡感覚が必要とされるであろう。

このような立場からする論文は、勢い散発的、非体系的なものにならない訳にはいかぬ。これらに統一を与えるものが、その基底にある意志であり、情念だからである。これは一のダイナミズムである。論文はそうではない。顕在化され、既に固定されている。それは隠された情念のダイナミズムを暗示するが、ダイナミズムそのものでは最早ない。かくしてこの立場は形骸化を嫌う。寡作であり小品に留るのは一の必然である。

このような事情は論文のテーマにも反映されずにはおかない。dativus ethicusの問題、*ни*と*не*の問題、非現実話法の*было*について、語順の問題、前置詞の選択の基準、動詞の格支配に伴うニュアンスの問題、等々すべてこの立場からの発想にかかるものであると思われる。

言語の具体に即しながら、論理化しがたい無定形なものを掬い取るには、自から強い論理が必要とされる。随分と強い論理の網を用意した心算でも、それによって得られるものは逃れ去ったものに比して余りにも僅かである。そのことは先生御自身だれよりもよく知っておられると思う。その空しさを知りつつもなお作業を続けて行くというまさにその事が、却ってその一掬を生彩あらしめるものだ、というのも、亦真実である。

To see a World in a Grain of Sand,

...

...

And Eternity in an hour.²

と言うのは私の好む詩の一節であるが、先生はこの詩のように一粒の砂に天空を視、一瞬のうちに永遠をみようとしていたのではないか。「現代ロシア語における新しい傾向若干について」という論文のエピグラフに掲げられたスウィートの一節は、私にはそのように読める。

語学というものはフィロロギーから発し、やがてフィロロギーに還るものだと言われているが、染谷語学は終始一貫フィロロギーと語学と文学の狭間で耐え抜いた、余り多くはない例の一つであると思われる。それを可能ならしめた最も基本的なものは、恐らくは母国語についての深い愛着ではなかったろうか。冒頭にこの論集の際立った特徴として言いたかったのは、そのところである。

以上の意味でこの論集は語学を志すものがその原点として座右に備えるべき書物の一つであると信じて疑わない。

²原文は To see a World in a Grain of Sand / And a Heaven in a Wild Flower:/ Hold Infinity in the palm of your hand/ And Eternity in an hour. ... (Auguries of Innocence) であることを、故蜂谷昭雄教授に御指摘戴いた。その後伊藤淳子助手に依頼して正確な原文を得た。高校の時のうろ覚えを確かめもせずに誤った引用をしたことを恥ずかしく思っている。

しかし忌憚なく言わしていただくとすれば、この抽象化、理論化を峻拒する姿勢には、何かどこかで「どうだ恐れ入ったか」と言われているような気がして、そして我々如き気の弱い怠け者はギックリして、そして本当に恐れ入ってしまうような所もある。

後学の諸君が本書に接して何も感じぬというのも困りものだが、さりとて戦わぬうちに意気沮喪してしまうのも困る。そこが心配である。

蛇足。作品は世に問われるや作家から離れて独立すると聞く。見当違いで片腹痛く思われるかも知れぬが、これは論集に対する私見に過ぎない。特に断っておきたい。

[補足]

これを再び読み返して冷水三斗の思いがする。若さの気負いの故とはいえ、実に生意気なことを書いたものだと思う。しかし事実は事実として消す事が出来ない以上、隠す訳にも行かないであろう。